

静岡新聞社 第28回「読者と報道委員会」

静岡新聞社の「読者と報道委員会」は4日、静岡市駿河区で第28回会合を開いた。議題は昨秋の台風24号を巡る一連の報道と、「平成」を振り返る報道・特集。フォトンバレーセンター長の伊東幸宏委員と、聖隷福祉事業団常務執行役員兼鎌田裕子委員が本社側と意見交換した。一般財団法人ベルナル・ビュフェ美術館常務理事の内山義郎委員は欠席した。

(進行は萩田雅宏編集局長)



伊東 幸宏 委員

伊東・ゆきひろ 1990年静岡大工学部助教授、同大情報学部教授、情報学部長を経て2010年から16年度末まで同大学長。17年度からフォトンバレーセンター長。県教育委員。早大大学院修了。工学博士。東京都出身、浜松市在住。



鎌田 裕子 委員

かまた・ゆうこ 聖隷浜松病院などで看護師として勤務後、聖隷福祉事業団で人材開発部長などを歴任。2017年1月から同事業団初の女性常務執行役員。浜松医科大学院修士課程修了。掛川市出身、浜松市在住。

「平成」を振り返る

改元を5月1日に控え、平成を振り返る連載「静岡の『平成』」を展開しています。元号で時代を区切ることに對してさまざまな意見もあるかと思いますが、記者は手探りで取材を進めています。

伊東委員 過去30年を総括する必然性はないという声もあるかもしれないが、折に触れて必要な作業。個人としては、1990年に静岡大に赴任し、静岡で過ごした時代がまさに平成。30年をコンパクトにまとめてあり、個人的には楽しい記事だった。

鎌田委員 記事を読むまで、ユーザーのはじめしやちよーさんが、静岡に関係あるとは知ら

なかった。いろいろな話題を静岡と絡めていて、分かりやすい。同時に今後の静岡がどう変わっていくのかが気になった。明るい未来を見たい一方、その中に渦巻く暗い出来事への不安もある。

伊東委員 「失われた何十年」という言葉があるが、平成生まれの若者は、日本が成長した時期を知らずに成人し、世の中にチャレンジすることが減った気がする。新しい元号で新しいことに挑戦する機運が高まるよう、この連載を結びつけてほしい。

鎌田委員 天皇陛下がお元気なうちに元号が変わることを私たちは経験したことがない。それがどんな変化をもたらすのかが興味深い。新たな時代がどうなるかは、

台風24号

昨秋の台風24号は暴風の影響で県西部を中心に大規模な停電が発生し、県民生活に大きな混乱が生じた。長期化した停電の原因や回復の見通し、広範囲に及んだ日常生活や経済活動への影響などが報道のポイントとなりました。

鎌田委員 浜松市在住なので、まさに身に降りかかった災害だった。台風接近の情報は新聞などで知っていたが、あれほどひどい状況は想定していなかった。当時、最も欲しかった情報は停電からの復旧見込み。電力会社のホームページだけではなく、新聞にも情報発信を期待したい。実際に今困っている読者に対し、助けになるような記事がもっと出たら良いと思う。

伊東委員 私も自宅が停電したため、身近な問題だった。台風は地震とは異なり、いつごろ危険になるのか事前に分かる災害。JRRの計画運休をはじめ、あらかじめ準備することが社会的な合意事項になってきている。災害が起きる前にどのような対策が進んでいるのかをきちんと報道していくことも重要だ。

停電発生から約半月後には、影響があった現場などの被害状況を検証する全5回の連載記事を掲載しました。識者談話や社説、コラムでも防災や災害に関わるテーマで幅広く情報を提供しました。

復旧情報ニーズ応えて 鎌田委員

課題指摘 一過性にせず 伊東委員

鎌田委員 人工呼吸器を常時使用している方の在宅医療の問題も紹介されていて、予期せぬ停電が生命に直結することを県民に広く知らせる機会にもなった。一方、停電対策につながる無電柱化は2016年に推進法ができたものの、実際には普及していない。広域停電の回避策がどうなっていくのかという問題について、紙面で触れる機会を増やしてほしい。

長引く停電でテレビやインターネットから情報が入手できない状況などを踏まえ、行政による給水所や携帯電話充電コーナーの開設、シャワー室の開放などの情報をまとめた「生活情報掲示板」の紙面も新たな試みとして展開しました。

鎌田委員 停電からの復旧状況が確認できる電力会社のホームページも、そもそも携帯電話などが充電できていないと見られない。今回の災害では私自身が、情報がないと人はますます不安になってしまふことを体感した。特に災害時は、より多くの人に生活情報掲示板の内容などが届くような新しい手法の開発にも期待したい。

伊東委員 電気がなくなると場合によって情報から全く隔離されてしまふ可能性もある中、生活情報掲示板の取り組みは、新聞で情報を伝える意義を改めて強調した。停電に対して今何をやらなくてはいけないのかなど、災害時は紙でないと具体的なアドバイスが届きにくいケースもあることを理解して報道してほしい。

伊東委員 連載記事では今回の問題点が整理されている。最も大事なことは今後の取り組み。社説などで「無電柱化の推進」に触れているが、根本的な対策として進めていくべきだ。県内の状況や行政の取り組みなどを折に触れて報道してほしい。一過性にせず、達成するまでしっかりと書き続ける姿勢も大事だろう。

多様性の広がり焦点を

転換点の報道にも期待

鎌田委員

見えにくい。新元号が変わる時、混乱も生じると思う。そこにもスポットを当ててほしい。

「平成」を切り口にした記事やコラム、社説なども掲載しています。新たな時代に向けて、取り上げるべきテーマはありますか。

鎌田委員 自分の記憶では遠いはずの出来事が昭和でなく平成だった。逆について最近だったものも多かった。記事を書く時、いろいろな軸があるはず。一つ一

つは意味があり興味深かったが、全編を通して何を伝えたいのか分かりにくかった連載もある。社説に関しては、起きている現象を客観的に的確に伝えてほしい。

伊東委員 この30年間で大きく変わった一つが多様性。例えば、30年前はプロスポーツと言えば、野球くらいだった。今はサッカーやバスケットボールもある。日本人の活躍の幅も世界を舞台に広がった。多様性の広がりに焦点を当てれば、もう少し楽しめる。

鎌田委員 テーマとは別に、記

事の継続性に期待したい。元号や災害の問題、女性活躍など。取り上げた記事がどんな影響を世の中に与え、その後どう動いたのかが見たい。その時々起きた事象が目の前を通り過ぎるだけではもったいない。

伊東委員 天皇陛下にとっては職責を果たされた期間がまさに平成。日本のためにどんなふうに関与されてきたのか。被災地をどれだけ訪問し、何力国を外遊されたのかなど、天皇陛下の足跡を国民がもっと知る必要もあると思う。

■「平成」を振り返る 平成とは一体、どんな時代だったのか。振り返ってみると、この30年は右肩上がりの成長を前提とした「昭和の構造」からの変革に迫られ、より成熟した社会へと脱皮するための過渡期だったと思えてならない。

冷戦終結にバブル崩壊、多発した自然災害、インターネット社会の到来、人口減少。平成に起きた出来

事は、私たちの暮らしに直接影響を与えたばかりではなかった。価値観や生き方といった目に見えない部分にまで、無意識のうちに変化をもたらしたのではないだろうか。

間もなく訪れる新たな時代は、誰もが輝く真に豊かな社会であってほしい。明るい未来を願い、今後も取材を進めていく。(静岡の「平成」取材班)

編集局から

■台風24号 台風などの災害報道は近年、防災の観点重視し、実際に被害が発生する前から読者に注意を呼び掛ける傾向を強めている。鉄道の計画運休をはじめ、社会の対応の変化は今後も広がるのが予想される。地方紙として引き続き、地域の減災に向けた取り組みを進めていきたい。

今回の台風では実際に停電の影響を受けた県西部の

記者も多く、日常生活の混乱と並行しての取材活動には苦勞が伴った。生活情報掲示板など、被害に遭った地域が今最も必要な情報を伝えていく手法について、今後も試行を続けていく。

災害の教訓を次に生かすためにも、公助・共助・自助の観点から重要な対策を繰り返し訴えたい。(社会部)